
 紹 介

「顎顔面補綴技工ベーシック」参加報告

佐々木 聡

明倫短期大学 歯科技工士学科

1. はじめに

明倫短期大学は今年度、開校10周年を迎えた。開校当時、歯科技工士養成所は全国で72校あり、歯科技工士と歯科衛生士養成所として、全国初の2年生短期大学として開校した。これからの医療の高度化、専門化に対応するために平成11年4月に生体技工専攻科、言語聴覚学専攻が開講した。そのカリキュラムの一つとして「臨床技工プロ講座」が平成17年に開講し、現在「デンタルインプラント特論」、「コンプリートデンチャー特論」、「キャストパーシャルデンチャー特論」、「ワックスオクルージョン特論」、そして全国の実技講習会でもなかなか開催されていない「顎顔面補綴技工ベーシック」の5講座があり「科目履修生」として、学外の歯科技工士も受講し、単位認定を行っている。

2. 「顎顔面補綴技工ベーシック」の紹介

「顎顔面補綴ベーシック」は常國剛史臨床教授と、アヘッドラボラトリーズの小川和也さんが助手として講座を担当した。

口腔顔面領域の先天性、外傷、悪性腫瘍切除後の顔面組織欠損の審美的回復手段としては骨移植、各種皮弁移植などによる再建外科手術、もしくはシリコンなどの人工物を使用して作製された顔面補綴（修復）エピテーゼなどがある。近年外科再建手術は著しい進歩が伺えるが、複雑な形態を有する患部などでは患者の十分な満足を得る審美的回復は困難を強いられているのが現状であり、時として人工物からなるエピテーゼが患者の顔面審美的回復や早期社会復帰の手助けとなる。

この講座では、エピテーゼの概要、作製手順などをスライド講義、実習を体験し、顔面修復の基礎を9月29・30日、10月27・28日の4日間にわたり、初

心者でも製作しやすい鼻腔エピテーゼの製作を通じて学ぶことができた。

1) 1日目

はじめに、講義内容、時間割説明から始まり、常國先生とアシスタントの自己紹介、受講生の自己紹介（氏名、年齢、出身校、技工士経験年数、専門分野、趣味、将来の目標など）が行われた。続いてTBS ノンTV「密着 医療テクニシャン」日本テレビ ニュースプラス1「人工ボディ療法 右脚復活」ビデオ鑑賞、口腔顎顔面補綴の概要、歴史、目的、エピテーゼの種類（眼窩、耳介、鼻腔、特殊など）、長所・短所、維持方法の種類、長所・短所などの座学が行われた。その中でもTBS ノンTV「密着 医療テクニシャン」、日本テレビ ニュースプラス1「人工ボディ療法 右脚復活」のビデオ鑑賞で、歯科技工技術を用いて、少女の右足を左足と同じ形態、色調に再現したテクニックが紹介され受講生全員が感心していた。

2) 2日目

鼻腔エピテーゼの作製手順の後、印象採得、石膏注入、模型製作ワックスアップ、埋没、流蠟の1工程ずつ細かい説明、デモンストレーションや指導があった。印象採得では、鼻腔に挿入する綿花の大きさ、長さ、ワセリンを塗布する範囲、印象材の置き方、表面形態、トレー代用の石膏の硬さなど、またボクシングの要領、石膏注入時の注意事項、作業模型の大きさ、ワックスパターンの適合性・表面性状（ブラシや探針でのキズの付け方など）、埋没時の高さ、開輪時のタイミングなど細々な指導があった。

3) 3日目

鼻腔エピテーゼの製作手順の復習を行い、これからの作業について説明があった。ワックスパターンの3倍の重量のベースシリコンにエピテーゼベースシリコン色彩調整を混入していく。着色材は白

→黄色→赤→青もしくは緑で少量ずつ混入し、白は透明感をなくし、黄色人種は黄色でベースの色を作り、皮膚の血色感を出すのに赤、色の深みを出すために、青か緑を混入する。大まかな色あわせで3日目を終了した。

4) 4日目

最終日の作業内容を説明後、実技に取りかかった。昨日調整した着色済のシリコンの1/10のキャタリストを混ぜ、フラスコに填入し、加硫(重合)する。(シリコンの場合は、重合とはいわず、加硫という)室温から一気に沸騰させ(今回は製作物の容量と臨床技工プロ講座の時間の関係から温度を一気に上昇させたが、実際は1時間かけゆっくり温度を上昇させる)冷却した。取り出しは辺縁がちぎれないよう、シリコンを丸めるように注意深く行った。顔面への試適後、辺縁調整、最終色調調整(表面着色)、着色定着、表面コーティングと行い、鼻腔エピテーゼを完成させた。特に最終色調調整では、これで色が決定されるため受講生は鏡をよく観察し、自分の肌の色に合わせるのに苦勞していた。エピテーゼ完成後、装着・取外しの説明後、専用接着剤を使用して装着し、鼻腔エピテーゼ患者の体験をした。その後、骨結合型インプラント症例の治療、技工手順、総括として、展望、問題(社会情勢、価格など)、患者さんとのコミュニケーションの注意点の説明が有り、活発な質疑応答、受講生の感想が述べられた。

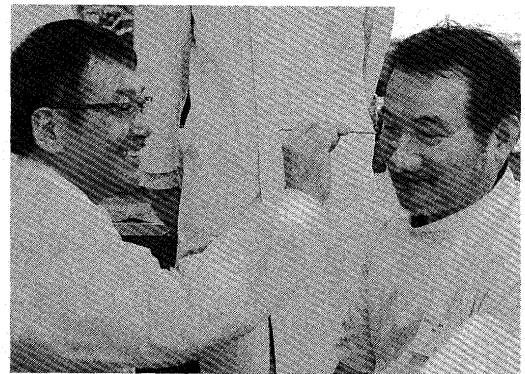
3. まとめ

口腔顔面領域欠損の患者さんの治療には補綴処置だけではなく口腔外科、放射線科、形成外科、整形外科、耳鼻科、言語治療科など多くの診療科でのチーム医療が必要となる。自分の情報だけではなく相手との情報交換をよく行い、患者さんに最良の治療を尽くすことが重要である。その治療の選択肢の一つとしてエピテー

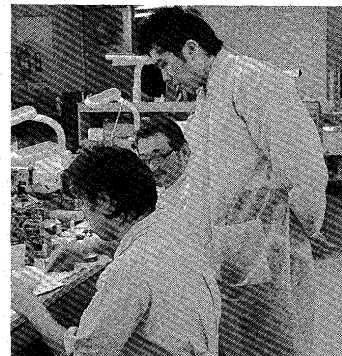
ゼ・プロテーゼがあり、患者さんが元気になり、社会復帰できれば、治療に関しては何でもありではないかという言葉で締めくくり、この講座を終了した。

4. おわりに

本プロ講座に受講生およびアシスタントとして参加し、顎顔面補綴の技工手順などを豊富なスライドビデオなどによりさらに理解を深めることができた。歯科技工技術を用いて、歯科治療から医科治療へと業務拡大していく分野のプロ講座であった。今後は歯科技工技術を応用し、アイデア次第では、色々な治療物が製作することができるということを学生に伝えることを自分の課題としたい。



最終色調調整のデモをする常國剛史先生



色彩調整を指導する小川和也先生